

---

# 僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

まり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

### 【Nコード】

N0980BA

### 【作者名】

まり

### 【あらすじ】

工藤愛子は独りだった 一年の終わりに転校してきた愛子は、教室空気に耐えられず屋上へいきお弁当を食べることに そしていざ食べようとする と突然、屋上の扉が開いた  
そこで初めて僕の恋は始まった

## 出会い（前書き）

二作目です

明久×オリ予定が愛子に

別に愛子は好きだからこれでいいですけどね

それではどうぞ

## 出会い

その出会いは突然で、だけど優しく、嬉しくて、僕の初恋になったんだ。

ホントに好きになって毎日気付けば彼のことはかり考えていたよ。その時あったことは、別にたいしたことないんだけどね。

いまはそんな彼と結婚して幸せな家庭を築いている。ちょっと忘れんぼうだけだね。でもそれがまたいいんだ。

「いつてきまーす」

「いつてらっしゃい あつまたお弁当忘れてる」

「あれ？ ホントだ いつもゴメンね」

「いいよ 夫婦だしそれくらい」

「じゃあ改めていつてきます」

「えー いつてきますのキスは？」

「なっ／＼／＼／ ……わかったよ（ちゅっ）」

「えへへ／＼／＼／」

「じゃあいつてきます、愛子」

「いつてらっしゃい、明久」

そう僕はバカで有名だった吉井明久と結婚しました。  
このお話は僕たちが結婚するまで、どんなことがあったか工藤愛子  
改め吉井愛子視点の話です。

## 出会い

「工藤愛子です　もう一年の終わりだけどよろしくね」

僕は文月学園っていう不思議な制度をもった学校へ転校してきた。  
試験召喚制度ってよくわからないやつ。二年生になってから使っ  
たらしいんだ。

でも僕は今一番友達が欲しい。だって何もできないもん。一年の最  
後だけあって皆、仲のよい友達がいる。

ハッキリ言って羨ましい。多分、数日間は誰からも話しかけれな  
いからなあ。

まあ半日経った時、つまりお昼の時間。友達がいない僕は独りでお  
弁当を食べることになる。皆は机をくつつけあって食べていた。

「（僕一人だけ浮いてるよね……）」

結局、空気に耐えられなくなって僕は屋上で食べることにした。

キィ

屋上の扉を開けると広くて青い空が視界を覆った。とても晴れやかな気持ちになる。

僕はベンチに座り独りお弁当を――

「あれ？ 先客がいる？」

――食べようとしたら誰かがきた。どこにでもいそうな普通の子、でも顔は少し可愛い？かもしれない

「君、初めて見るけど転校生？」

「うん 工藤愛子です よろしく」

「一人ってことは………僕と一緒に弁当食べる？」

「えっ……」

なんで？なんでイキナリそんなこと言うのさ。

「僕の名前は吉井明久 よろしくね工藤さん」

「……………」

突然のことに反応できなかった。

なんで？

なんで？

なんで？

なんで初対面の僕を誘ってくれたの？

ツウ

涙がでた。

「えええ！？ なっなんで泣くの！？」

わからない。なんでかしらないけど涙がでたんだもん。別に悲しくはないよ。だってー

「嬉しい 嬉しいよ吉井君」

ギユウ

衝動に駆られて吉井君に抱きついた。

「わわっ ちょっと抱きつくのはー」

「お願い もう少しだけこのままでいさせて」

僕はいま泣いている。嬉涙を流している。ホントは今すぐに一緒にお弁当食べたいのに泣いた顔を見て欲しくない。

僕の体は震えていた

「……わかったよ　いつまでも待つよ」

吉井君はそう言って優しく僕を抱いてくれた。吉井君の体温が直に伝わってすごく暖かい。それですごく落ち着く。僕はそれから長い間吉井君に抱きついたままでいた。

ドキドキドキドキドキドキ

胸が高鳴っている。ちょっと苦しい。

これが恋かな？

こうして僕の初恋が始まった



## 別れ（前書き）

明久の過去が少しです

それではどーぞー

## 別れ

しばらくして僕は泣きやんだ。でも顔をあげることはできなかった。だって男の子の胸で泣いたんだよ？

恥ずかしいし、泣いてたから目がきつと赤くなってるもん。それにもっと吉井君の体温を感じたい。

「泣きやんだみたいだね？　ならそろそろ……」

「……うん」

無情にも吉井君の方から言ってきた。まあしかたないよね。いつまでも抱きつかれたら嫌だろうし。そう思っ僕は吉井君から離れた。

「大丈夫？」

「うん　ありがとう」

「じゃあお弁当食べよっか」

「……うん」

僕たちはお弁当を食べ始めた。ただお互い話すこともなく、ただ時間だけが過ぎていく。何か話さないと。

「ごっゴメンね吉井君」

「ムグムグ 何が？」

「僕につき合わされてお弁当食べるなんて嫌でしょ？」

「ゴクン 別に むしろ……何でもない」

吉井君はそこで話を切ってしまった。また時間だけが過ぎていく。  
えっ？えっ？どうすればいいの？

「……明日も一緒に食べる？」

「えっ……？」

いついま何て？

また一緒に食べてくれるの？

「嫌ならいいよ 早くクラスに馴染まないといけないからね」

「ぼっ僕は大丈夫 でも吉井君は？」

僕につき合わされるなんて迷惑に決まってるよ。吉井君にだって友達はあるだろうし。

また僕と一緒に食べなんてしなくてもいいんだよ？

「僕も大丈夫 少なくとも工藤さんが友達を見つかるまでは毎日でも一緒になるよ」

「……ありがとう」

あっまた泣きそうになってきた。吉井君はズルイよ。僕にとって嬉

しい言葉でしか言わないんだもん。  
こんな吉井君はきつとモテるんだろうな。

「ねえ吉井君 吉井君には彼女っているの？」

「ほえ？」

うわあああ／＼／＼／

なんてこと聞いているの僕！？これじゃまるで吉井君に気があるって  
言ってるようなもんだよ。

ううう恥ずかしい……

「彼女？ いないけどどうしてそんなこと聞くの？」

「えっと そのー 興味本意？」

「ふーん」

ふうなんとかバレなかったかな？でもバレてて何も言わないのかも  
しれない。

うーん。どっちかな。

キンコーンカーンコーン

「あっもうクラスに戻らなきゃ」

えっもう？早いよ。

「じゃあね工藤さん またー」

「うん  
バイバイ」

「――また……いや 次の休み時間にも僕が会いに行くよ じゃあね」

「ええええええええー！！！！／／／／／／／／／／」

僕の叫び声が空に響いた

S  
i  
d  
e  
明  
久

「僕が会いに行くよ」

何を言ってるんだ僕は？

別に嘘を言ったじゃない。ただホントに工藤さんに会いに行っても居づらい教室から連れだそう。そう思った。

でも工藤さんは自分の力でクラスの人と馴染まなきゃいけない。それを考えていたからこそ、あんなこと言うつもりはなかった。でも僕は口にしてしまった。

口にしなきゃならない気がした。

「あの時の僕と工藤さんを重ねているのかな？」

僕も昔、転校してきて同じことを味わった。だから工藤さんの気持ちにはよくわかる。

寂しくて。

悲しくて。

誰かに助けて欲しくて。

「工藤さんは僕が助けたのか……」

僕も助けてもらった。その子とは友達になっていつも一緒にいた。中学の卒業の時に別れちゃったけど、いまでも大事に思ってる。

でもそれは一年以上一緒にいたからであって、もうすぐ一年が終わる。二年生になる。その時に振り分け試験があるけど多分同じクラスにならない。

「だからって助けない訳にはいかない」

辛い別れになれそうだな。

そう思うと胸がキュウと締め付けられた。

## 本当の別れ（前書き）

悲しめです

それではどーぞー

## 本当の別れ

「（次の休み時間に僕に会いに来るって言ってたけど、吉井君はホントに来るのかな？）」

次の休み時間が待ち遠しかった。早く授業終わらないかな。そう思っ  
てチラッと時計を見るけど全然進んでない。

待っている時間が長く感じるのはちよつと憂鬱。その間、吉井君の  
ことを考えると胸がドキドキする。  
やっぱり好きになったのかな。

キンコーンカーンコーン

待ちに待った休み時間になった。吉井君、来てくれるかな？

ガラッ

「ここに工藤さんっている？」

あっ吉井君。来てくれたんだ。そのっ僕に会いに／／／／／

『工藤？ 転校生の？』

「そつだよ 工藤さんに用があるんだ」



「よっ 吉井君／＼／＼」

「工藤さん 言った通り会いに来たよ じゃあちよつと外出しよう？  
工藤さん借りてくよ？」

『あっああ どうぞ』

「行こうか工藤さん」

吉井君は僕の手を掴んで教室の外へ連れていった。

つてええ！？いきなり手を／＼／＼／

吉井君ってプレーボーイなの！？

「違っよ」

「えっ！ 何でわかったの？」

「……声に出た」

嘘っ！声に出てたんだ。また恥ずかしい思いしちゃったよ。それに  
吉井君に失礼だよ。

「ごっつゴメンね」

「いいよ 気にしてない」

吉井君は僕を教室からそう離れてない所へ連れてきた。一体どうし  
たんだろ？

「明日には僕はいらなくなってる」

「えっ？」

何言ってるの？どういう意味？

なんで吉井君がいなくなるなんてことを言うの？

「あんな風に連れ出したらきつと僕と何かあったのか聞かれる  
のときにちゃんと話ができれば友達ができるでしょ？」

「あつ……」

もしかして吉井君はそこまで考えて手を掴んだの？僕はただ約束を  
守って来てくれたとしか思ってたのに。

「友達ができればお弁当もクラスの誰かと食べられるでしょ？ な  
ら僕は明日からいらないよね」

「そっそんなことないよ！ まだ友達ができるかもわかってないの  
に……」

「今日友達ができなかったら何時できるの？」

「それは……」

「工藤さん 大丈夫だよ きつとできるさ」

確かに吉井君の言う通り今日できなかったら何時までもできないと  
思う。

でも友達ができたら吉井君に会えなくなっちゃう。どうしよう。

「話はそれだけ　じゃあね」

「あつ待って！」

僕の声は聞こえてるハズなのに吉井君は振り返らずに戻っていった。

迷ったらダメだ。吉井君は僕にチャンスをくれたんだ。吉井君の気持ちに答えるためにも友達を作らなきゃ。そう決意して僕は教室へ戻った。

教室

『あつ戻ってきた』

『ねえ　吉井君とどういう関係なの？』

僕は教室に戻ったら皆に質問攻めにされた。僕はそれに見合った答えを述べていった。それだけで友達になろうって言うてくれる子もいた。

でもこれで吉井君とは会えなくなった。

いやっ会わなくちゃ。だって僕まだ吉井君にお礼言ってないもん。次の休み時間、僕が会いに行く。そしてお礼を言っんだ。

ありがとうって。

いよいよ休み時間となった。あつても吉井君のクラス知らないや。  
聞いちゃえばいいか。

僕はさっき友達になつた優子に聞いてみた

「優子、吉井君ってクラスわかる？」

「吉井君？ たしかCクラスだったと思うわよ」

「そっか ありがとう」

早く吉井君の所へ行かなくちゃ

Cクラス

「ねえ 吉井君いる？」

「クラスに着いてすぐに僕は聞いた。会ってお礼を言うだけなのに  
必死になつてゐる自分にビックリだよ。  
僕の質問には赤髪の男の子が答えた。」

「明久？ つてことはお前工藤か 残念だな、明久はいない いな  
いつてよりお前に会う気がないか」

「！ 何で会う気がないの！」

「明久から伝言だ 『友達は作れた？ なら僕なんかと仲良くする  
必要はないからね、二度と会わないようにするよ 頑張つてね』 だ  
そうだ」

「吉井君…… 別に会うくらいいいじゃん」

「工藤、お前からは伝言ないか？」

「赤髪の子は僕にそう聞いた。」

「あるよ。あるに決まつてゐるじゃん。」

「吉井君にありがとつて伝えて」

「ああ わかった」

「お礼は直接会つていいと思ったけど吉井君は僕に会わないって。  
伝言になつたけどしかたないよね。」

「僕は自分の教室へ戻ろうとした。吉井君と会えないならここにいる  
必要はないしね。」

「おっと もう一つ伝言があるの忘れてた」

「！」

「たしか『別れが辛くないように会わなかった ゴメンね』だ」

僕は振り返らずにそのまま教室へ戻っていった。

でもそのまま帰らずにトイレに寄ってー泣いた。

「辛くてもいいから、それでもいいから会いたかった 会いたかったのに……」

そんなのずるいよ

「次会えたら、僕から逃げないで……」

転校初日から僕は出会いと別れを味わった。それは長い間一緒にいた友達と離れるくらい悲しかった。

その想いを胸に僕は二年生になった

## 本当の別れ（後書き）

次はもう二年生になったところからです



吉井君は悲しくないの？（前書き）

こつこつの自己投影しながらだと書いててくるしいです

それではどーぞー

吉井君は悲しくないの？

僕が文月学園に転校して初めての春がきた。校舎へと続く道には桜が咲いていて、心を奪われる。とても綺麗だ。でも僕にはそれより気になっていることがあり、急いで校舎へ向かった。

「おはよう、工藤」

「おはようございます、西村センセ」

この人は鉄人こと西村先生。トライアスロンを趣味とするゴツい先生なんだ。

「ほら、振り分け試験の結果だ 受け取れ」

「ありがとうございます」

僕結構頑張ったからなあ。イー線いつてと思うんだけど……  
そう思って結果の書いてある紙を見た。

工藤愛子…… Aクラス

「よく頑張ったな おめでとう」

「ありがとうございます やったAクラス」

きつと優子も一緒のクラスだね

「うむ 工藤は転校したての時と比べてずいぶん変わったな」

「そうですか？」

「最初は少し心細い感じがあったが今はハキハキしている いい友人ができたな」

確かにいい友達はできた。優子は勉強もできるしスポーツもできる。性格にはちよつと難があるけど基本優しいし、からかうと面白い反応をする。

でも西村先生、元はといえば――

「それは吉井君のおかげです」

「吉井？ あのバカがか？」

「はい 最初クラスに馴染めなくて一人でお弁当を食べようとした時、一緒に食べる？ って吉井君が誘ってくれたんです」

そうだよ。今の僕があるのは吉井君のおかげなんだ。あの時はごく助かったよ。

……なんかすぐく会いたくなっちゃった。

「ほお あの吉井がなあ」

「それにクラスの人と仲良くなれたのも吉井君のおかげなんですよ？」

「そうだったか 吉井はただのバカだと思っていたが、そういう一面もあったか 今度から吉井に対する接し方を変えるかな？」

吉井君は一年の最後に観察処分者になった。でもそれはきっと誰かの為にやったことだと僕は思ってる。

「バカだからこそ人に対する優しさもある、それも吉井君の良いところですよ」

「そうかもしれんな」

「そうですよ じゃあ僕は行きますね」

「ああ 一年間頑張れよ」

そろそろ教室に入ろうと思って話を切り上げた。色々吉井君の話をしたら別れの時を思い出した。

あの時、僕を辛くさせないために吉井君は会わなかったけど……

吉井君自身はどうだったのかな？

「西村先生 吉井君はもう来ましたか？」

「いや、まだだが？」

「なら一つ伝言をお願いします」

「わかった 何だ？」

僕は深呼吸してこう言った。

「吉井君は僕と別れて悲しくなかった？」です」

「うむ しっかりと伝えておく」

僕は疑問に思ったことを伝えてもらうことにして、今度こそ教室へ向かった。

side 明久

正直言うとお世つている。

登校時間を大幅に遅れた上に玄関には鉄人が立っている。まずい、これは非情にまずい。

「吉井、遅刻だぞ」

「すみません許してください」

とりあえず土下座で機嫌をとろうとした。

「何だ？頭を下げて 踏んでほしいのか？」

「すごいS発言！ あんたはそれでも教師か！？」

生徒の頭を踏むってどんな脳してた？やっぱり脳まで鉄でできてるんじゃないの？

「振り分け試験の結果だ 受け取れ」

「あつすいません」

いつもより解けたからなあ。十問に一問は解けたからCかDってところかな？

吉井明久……Fクラス

「ば……かな」

「お前は観察処分者になるほどバカだ Fクラス以外ありえない」

「傷ついた！ 今の言葉で深く傷ついた！」

いつもと違って精神攻撃！？  
やることがエグいぞ！

「それは困る お前の優しい心は傷つかれたらイカン」

「はっ？」

鉄人が僕の優しい心を心配した？

気持ち悪！

吐き気がするわ！

「一体鉄人に何が起こった!？」

「誰に思考のプログラミングをしてもらったんですか？」

「前言撤回 お前に優しい心などない」

「やっぱりな。鉄人が僕を心配するワケない。あつたとしたら天変地異だ。」

「まったく 折角いい話を聞いたと言っのに」

「いい話？」

「お前が工藤のことを助けてやったという話だ 感謝してたぞ」

「! …… 工藤さん」

「僕に感謝する必要ないじゃないか。結局は工藤さん自身の力で友達もできたんでしょ？」

「僕はキツカケを作っただけなんだ。感謝なんてそんなー」

「それともう一つ 工藤から伝言だ」

「伝言？ 僕に？」

「ああ “吉井君は僕と別れて悲しくなかった？” だそうだ …… 吉井？」

「すみません、失礼します!」

僕は鉄人から走って逃げ出した。走りながら先刻の言葉を頭の中で何度も反復した。

“吉井君は僕と別れて悲しくなかった？”

僕は立ち止まって息を整えた。

そして近くにあった柱を殴りつけてこう言った。

「悲しくなかったワケないよ！」

短い間だったけど工藤さんと僕は同じ思いをしていて、親近間が湧いていた。それでも僕みたいなバカと一緒にいたら駄目になると思っ  
て別れた。

それはまるで長い間一緒にいた友達と別れるくらい悲しかった。

柱を殴った痛みじゃなくて胸を締め付ける痛みに僕は涙を流した。



吉井君は悲しくないの？（後書き）

胸が苦しくなった方

ありがとうございます

苦しくならなかった方

もっと頑張ります

再会には苦しい選択（前書き）

今回は普通です

それではどーぞー

## 再会には苦しい選択

side 明久

「……このバカでかい教室は何？」

普通の五倍の広さはある。これが噂のAクラスなのか？  
中をちよつと覗いてみよう。うわっ！リクライニングシートに個人  
冷蔵庫に空調、パソコンってそこまでやる？  
まるでホテルじゃないか。

「木下優子です 趣味はー」

ふーん。今は自己紹介か。皆やつぱり頭よさそうだなあ。  
つと次は……！？あの黄緑色の髪。まさか……。

「工藤愛子です 一年間よろしくね」

「なっ……！」

やばっ！声だしちゃった。逃げよう。

僕はその場から逃げ出した。まさか工藤さんがAクラスだなんて…  
…。

「（ガラッ）吉井君！？」

何で教室から出てくるの！？会うつもりはないんだ！  
君は僕と関係をもっちゃ駄目なんだよ。ましてAクラスなんてなお  
さらだ。

「吉井君……何で僕から逃げるの？」

「っ！……くそっ！」

工藤さんの言葉に胸が痛くなった。

違うよ。逃げてるんじゃない。これは工藤さんの為なんだ。  
だから……だから僕をー

「そんな悲しい顔で呼ばないでよ……」

そのまま僕はFクラスまで逃げ込んだ。

「（ガラッ）ハアッハアッ 遅れました」

「早く座れウジ虫野郎！」

「雄二か…… 先生がいないなら大丈夫だね」

「？ いつもの明久ならリアクションがあるはずだが……」

席は自由みたいだ。空いている一番後ろの席に座ろう。

カバンを置いて息を整える。それと同時に工藤さんの言葉を思い返す。

『何で僕から逃げるの？』

「……………言えないよ」

僕は誰も聞き取れないような小さい声で工藤さんの言葉に答えた。  
自分にだけわかる真意に頭を悩ませて担任の先生が来るまで孤独に  
工藤さんのことばかり考えていた。

side 愛子

「皆さん進級おめでとうございます 私はこの二年A組の担任、高  
橋洋子です よろしく願います」

僕たちの担任は知的女性の代表のような人だった。

「まずは設備の確認をします ノートパソコン、空調、冷蔵庫、リ  
クライニングシートその他に不備がある人はいいますか？」

あはは。これで不備があるって人はいないんじゃないかな？ 贅沢す  
ぎるような気がするんだけど……。

「不備はないようですね それでは順に自己紹介をお願いします」

あーやつぱりあるんだ。少しは期待してたんだけどな。

でも僕はもう大丈夫。だって吉井君のおかげで変わったからね。

「ー それでは次の人、お願いします」

僕の前にいる優子の自己紹介が終わって僕の番になった。

まあ普通に趣味とか言えば問題ないよね。

「工藤愛子です 一年間よろしくね」

『なっ……!』

あれ?今廊下から声がしたような……。気のせいかな?  
気になって廊下を見てみた。

「…………え?」

そこには窓越しに僕を見て驚いた顔をした人がいた。あれってまさか吉井君?

その人はその場から走り去っていった。まるで何かから逃げるように。

僕は吉井君なのか確認するために急いで教室から出た。

「(ガラッ) 吉井君!？」

逃げるように走る人が僕の呼びかけに反応してチラッと僕を見た。間違いない、あの顔は吉井君だ。でも何で逃げるんだろう?折角会えたのに……。

もしかして僕に会いたくないの?

その疑問は僕を悲しませた。悲しくて涙がでそうになるくらい苦しませた。それと同時にそんなハズないと言いついて、吉井君に聞いた。

「吉井君……何で僕から逃げるの?」

吉井君はまた反応して僕を見た。振り返ったその顔には悲しみに溢れていた。

僕から逃げているのが悲しいの?なら何で逃げるの?

そのまま吉井君はFクラスの教室まで走って逃げ込むように入っていった。自己紹介の途中だったし僕は諦めて教室へ戻った。

「……逃げるならあんな顔しないでよ」

戻る途中ポツリと言ったその言葉は誰もいない廊下に静かに響いた。

side 明久

「雄二、相談があるんだ　ちょっと廊下まで」

「別に構わんが」

僕は自己紹介の途中できた姫路さんが腐った畳や隙間風がヒドイ窓の教室にいるのは可愛そうだと思って雄二を誘った。

「で用は何だ？」

「姫路さんがこんな所にいるのは可愛そうだから試召戦争を起こしたい」

「何？　試召戦争だと？」

僕は無言でうなずき――

「それもBクラス相手に」

と言った。

「なんでBクラスなんだ？　そこまで狙うならAクラスだろ　何か理由でもあるのか？」

「だってAクラス相手じゃ「嘘だな」勝てるわけって雄二！　最後まで言わせてよ」

「ホントは違うだろ？　俺には何かを守ってるように見える　誰か知り合いがいるのか？」

その言葉にグサツときた。確かに僕はAクラスには工藤さんがいるって考えた。工藤さんにこの教室を使ってほしくない。そう思っていた。

けどあえて口にはしなかった。

「別に　ただ実力的に無理だと思ったただだよ」

「そうか　でも悪いな、俺はAクラスを倒したい　勉強だけが全てじゃないって思わせるためにな」

「雄二、それだけは止めてくれないかな？　頼む」

「姫路の実力はAクラスだ　可愛そうだと思うならAクラスにするべきだろ」

「そうだけど……」

でもそれで勝ったら工藤さんが……。



「自分勝手なこと言うな 皆もできるならAクラスだと言うはずだ  
それが駄目なら俺は乗れない」

「……………わかった Aクラスをやるう」

「（ニヤッ）そうと決まれば早速説明するぞ」

雄二はそういつてFクラスに戻っていった。多分Aクラスと戦うと  
きに工藤さんと会うことになるだろうな。それが敵同士だなんて…  
…。

「感動の再会にはならないな」

僕は再会には苦しい選択をしてしまった。

敵……かあ（前書き）

展開はいい？

そんなことはありませんよね？

それではどーぞー

敵……かぁ

「私たちCクラスはAクラスに試召戦争を申し込む！」

つてCクラス代表の小山さんが言ってきた。優子のことを睨みつけてたけどどうしたのかな？正直AクラスとCクラスじゃ実力が違うから意味ないと思うけど……。

「勝者、Aクラス」

ほらね。予想通り勝ったよ。

そういえばFクラスもDクラスとやって勝った後、Bクラスとやってるみたいだけど……まさかね？  
そう思ってたけど……。

「……Aクラス代表はいるか？」

こういう時ってどう反応すればいいのかな？卑怯で名高い根本君が女装してやってきた。その顔は絶望の色に染まっている。

つてことはFクラスが勝ったんだ。そうなると次は僕たちとやるつもりなのかな？そうだとしたら吉井君とは敵同士で再会することになるのか。

「……おえ」

とりあえず根本君が来てから止まらない吐き気をなんとかしよう。

「一騎打ち？」

「ああ　Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「何が狙いなの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

恒例の宣戦布告。対談してるのは優子とFクラスの代表。優子はこういうの得意だから率先してやっている。Fクラスは他にも数人来てるみたいだね。

そこには吉井君もいた。とても気まずそうにしている。僕が視線を向けたらチラッと見て顔を逸らした。

顔を逸らすってことは僕のこと意識してるってことだよな？吉井君は何か理由があって僕と会いたくないだけなんだよね？

「それならこっちから行くからね」

意を決して僕は吉井君へと足を進めた。

side 明久

工藤さんがこつちを見た。あーもう、僕は来たくないって言ったのに雄二の奴「この戦争のキツカケはお前なんだから」とかいつて上手く丸め込みやがって。

って工藤さんがこつちきてるじゃん。これじゃあ今までの苦勞がパ―じゃないか。雄二、後で覚えてろよ……。

「吉井君、ちよつといいかな？」

キターー！やっぱいようどうしようこれ？どうしようこれ？とりあえず了承するべきなの？

『『うるせーよ！ さっさと行け！』』

天使と悪魔に罵倒された！？くっ！仕方ないか……。

「別にいいよ」

「じゃあ二人きりになれるとこに行こう」

二人きりって……大事な用事ってことだよね？つまり僕が工藤さんを避ける理由とか鉄人に伝言までしたことの答えかな。

ガラッ

僕たちはAクラスから出て話しをすることになった。

「単刀直入に言うよ 吉井君、何で僕から逃げたり顔を逸らしたりするのさ」

やっぱり……。ここまできたら諦めて全部話そう。

「理由は簡単だよ 僕が観察処分者で工藤さんがAクラスだからさ 僕たちが馴れあつてたら工藤さんまで目をつけられる そんなことさせられないよ」

「じゃっじゃあ僕のこと嫌いになったワケじゃないんだね？ よかつたー」

「へっ？」

もしかして僕が工藤さんのこと嫌ってるからそんなことしたと思われてたの？それは何というか……すごい誤解だね。

「もー毎日が気が気でなかったよ」

「毎日って僕のことそんなに思ってたの？」

「えっいやっあのっ……まあ、ね／＼／＼／」

動揺した工藤さんはみるみる赤くなった。うーん言葉の選択ミスったかな？

「じゃあもう一個質問 西村先生から伝言してもらったと思うけど僕と別れて悲しくなかった？」

「それは……そりゃ悲しかったよ」

「じゃあ何で今まで会ってくれなかったの？ 悲しいなら普通会つでしょ？」

それはそうだけど。でもー

「ーでもあの時間問題見だった僕と一緒にいたら、きっと工藤さんは「勝手だね」……え？」

工藤さんは目に涙を浮かべていた。それでも真っ直ぐ僕を向いていて決心した顔をしていた。  
でも勝手って……。

「そこには僕の気持ちも吉井君のホントの気持ちも入ってないよ僕のことを考えてくれたなら僕の気持ちを第一に考えてよ！」

その言葉にまた胸が痛くなった。凶星だった。僕は工藤さんの気持ちを無視して自分を通していた。

「僕は吉井君に会いたかった また一緒にお弁当食べたりしたかった 吉井君にありがとうって直接言いたかった」

「……………」

「僕に会わなかったのも吉井君の優しさって分かってたけど、でも僕はそれでも会いたかったんだよ」

「……………ゴメン」

「謝るくらいなら最初からそんなことしないでよ！ うっ うっ  
ぐすっ うえーんっ ひぐ」

「（ギユウ）ホントにゴメン」

感情が溢れだしたのか工藤さんは泣いてしまった。そんな彼女を僕は優しく抱きしめた。

「僕も工藤さんに会いたかった。だけど自分の気持ちを抑えてた」

「そん……なの、駄目だよ。ちゃ……んと僕に会ってよ」

「うん。次からは逃げないよ。約束する」

「絶対だよ？」

「うん」

僕は腕の力を弱め工藤さんを解放した。こんな時に失礼だけど、その……工藤さんの顔がメチャクチャ可愛かった／＼／＼。あああー顔が暑くなってきた。はっ話を逸らそう。

「そろそろ戻ろうか？ 対談も終わってるだろうし……」

「そうだね」

そう言ってAクラスへ足を運ぶ。とりあえず赤い顔は隠せたかな。そこでフツと思いついたように工藤さんがー

「あっ！」

と声を発した。

「どうしたの？」



「折角二人なんだからお礼言つとこうと思って」

「別にいいよ」

「いいじゃん　ね、目閉じて」

お礼をするのに何で目を閉じなきゃいけないんだろう。そう疑問に思っても従って目を閉じた。

「今更言葉でお礼言つのもなんだし……ね」

その言葉を聞くやいなや僕の唇に柔らかくて少し湿った感触があった。押しつけられるような吸いつかれるような感じに戸惑いながらも何が起こったかわからないまま同じように唇を押しつけた。

「んんっ」

工藤さんの甘い声がすぐそばで聞こえた。そしてよくわからない感触は惜しむように離れていった。そこで目を開けると僕と工藤さんの唇を繋ぐ一本の銀色に光る糸ができていた。まっまさか……これって……。

「吉井君結構大胆だね　でもキス上手だったよ」

恥ずかしそうに僕を見ながら頬を赤らめる工藤さんを見て意識が飛んだ。

バタンッ

最後に覚えているのは顔の痛みと廊下の冷たさ、そして柔らかいあの

感  
触  
だ  
け  
だ  
っ  
た  
。

敵……かぁ（後書き）

やりすぎましたかね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980ba/>

---

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

2012年1月5日18時52分発行